

# 東京低地東部の景観

## 葛西における景観的特徴とその変貌

### Landscape of the Eastern Part of the Tokyo Lowlands: Features of the Landscape in Kasai and Their Transformation

谷口 榮

はじめに

① 東京低地の地勢と葛西

② 葛西の景観的特徴

③ 老旅人の見た川沿いの景観

④ 開発と景観

おわりに

#### 【論文要旨】

東京都東部に広がる低地帯を東京低地と呼んでおり、隅田川以東の現在の葛飾・江戸川・隅田・江東区域は歴史的に葛西と呼び慣わされてきた。江戸時代、葛西は江戸近郊の行楽地として、多くの江戸庶民が足を運んだ。その様子は、十方庵敬順の『遊歴雑記』や村尾正靖の『嘉陵紀行』など当時の史料からうかがい知ることができる。

本稿では、江戸人が訪れた葛西地域の景観はどのようなものであったのかを探り、その景観的特徴から東京低地に位置する葛西の地域性の一端を明らかにすることを目的とした。分析の結果、葛西の景観の特徴として、眺望の利く「打開きたる曠地」と、川辺を中心とした川沿いの風景であると指摘することができた。葛西は、河川が集中し、低地ならではの起伏の乏しい平らな土地といえる。その土地には「天然なる奇麗にして眺望いわんことなし」と、水辺には蘆荻が繁茂し、開けた土地には草花・木・鳥などの自然の織り成す「天然」があり、また眺望の素晴らしさが江戸の人々から好まれていたことがわかった。中川や小合溜には釣人が集う格好の憩いの場ともなっていた。

18世紀以降、江戸庶民の「延気」の場として『江戸名所図会』の中でも紹介されるようになった葛西は、江戸の人々を受け入れるために、寺社仏閣や信仰だけでなく、茶屋などの休み処が設けられ、川魚料理などの名物や花名所を整備したり、江戸と行楽地葛西を結ぶ曳舟川に引舟を運行するなど、行楽地としての舞台装置が整えられていったのである。

しかし近代以降、荒川放水路開削に伴いかつて葛西と呼ばれた広大な開けた土地が分断されてしまう。さらに関東大震災と第二次世界大戦という二つの災害を契機として、都市化という波に浸食されながら、江戸の人々に愛された葛西の風景は、川の汚れとともにその面影を失ってしまった。

## はじめに

東京都の東部には、いわゆる下町と呼ばれる地域が広がっている。この地域は、地理学的な区分によるところの「東京低地」と呼ばれる低地帯に属し、隅田川よりも東の地域は近代以前は歴史的に「葛西<sup>かさい</sup>」と呼び慣わされてきた。現在の行政区でいうと、かつての葛西のおよそ北半分は現在の葛飾区が占め、南半分の東部に江戸川区、西部に墨田区、墨田区のさらに南に江東区が位置している。『増補葛飾区史』上巻の「はじめに」には、葛飾区の地域的な特徴について以下のように記している。<sup>(1)</sup>

皇城地から10キロの地点に位置する本区の地域は長い間、典型的な都市郊外の農村であった。

区の北部を通る水戸佐倉の幹線道路が江戸と近隣地域を結び、それらの道路沿いには町並みがわずかに形成されていた。しかしつい五〇年ほど前までは、これらの地区を除き、見わたすかぎりの田圃とこれに付随する湿地や池沼が散在し、葛西三万石の米産地といわれたころの田園風景がそのままみられた。

隅田川以東の葛西は、先の抜粋からもわかるように、江戸や東京という都市近郊に広がる水郷地帯というふうに理解され、一般的には農村というイメージが強いようである。地域を都市か、農村か、という色分けで見ると、葛西は農村に属しよう。しかし、農村という単純な見方だけで葛西をとらえてしまうと、田圃の広がる景色しか見えてこない。

また、先の「典型的な都市郊外の農村」という江戸との位置関係が説明されるだけでは、都市江戸をとりまく農村地帯という理解にとどまり、葛西の有する地域性を十分に説明することができないのではないだろうか。

本稿では、葛西の地域性について「景観」に着目してその特徴を探ってみたい。まず、景観の舞台となる葛西の位置する東京低地の地勢を押さえ、その上で江戸以前の葛西周辺の景観描写から低地特有の葛西の景観の特徴を概観する。次に葛西の景観的特徴を細かく観察するために、『遊歴雑記』や『嘉陵紀行』を素材として葛飾区域の川沿いの景観にスポットを当てることにする。特に加藤貴氏が指摘した「十八世紀以降の江戸市民の広範な行楽行動の展開の背景には、江戸の都市化の問題と、都市市民の自然観や都市的な信仰形態があった」点に注目し、江戸の都市化によって失われた自然に対して、江戸人がどのような自然を江戸近郊の葛西に求めたのかについても探ってみたいと思う。最後に、失われゆく葛西ならではの景観の変貌についての所見を述べ、景観という視点からみた葛西の地域性をとらえるとともに、東京低地のもつ景観的特徴の一端を明らかにすることを目的とする。<sup>(3)</sup>

## ①……………東京低地の地勢と葛西

### (1) 関東平野最南端の東京低地

東京都区部の地形は、崖線下を南北に通過するJR京浜東北線を境に、西側の丘陵を武蔵野台地、東側に広がる低地帯を東京低地と大きく分けることができる。東京低地とは、赤羽から上野公園にいたる武蔵野台地の東縁から、千葉県松戸市から市川市へのびる下総台地西縁に挟まれた沖積地を指し、南側が海と接する関東平野の最南端に位置している。行政的には、中央・墨田・江東・足立・葛飾・



州などの微高地が発達しており、その微高地は古代から居住空間として利用されてきた（図1）。

## （2）海水面の変化と東京低地の形成

東京低地が形成されたのは、今から1万2000年前、日本では土器と弓矢が発明され、旧石器時代から縄文時代へと移行してからである。縄文時代以前の旧石器時代は、東京低地は形成されておらず、現在の地表から地下数十メートルの所が当時の地表面であった。今から3万年前頃、地質学でいう第四紀更新世（洪積世）の最終氷河期にあたり地球規模で海水面がおよそ百メートルも低下したといわれている時代である。今の東京湾は湾ではなく、大きな谷地形で、谷の底には関東各地の河川から水を集めた古東京川が流れて、現在の浦賀水道あたりで海へ注いでいた。

その後、温暖化に向かい、それと共に海水面が上昇し、海岸線が徐々に内陸部へ入り込んでいった。この海水面の上昇に伴う海岸線の進行を縄文海進と呼ぶ。縄文時代前期（今から6000年前）にはそのピークとなり、関東地方の奥まで入り込み、奥東京湾を形成する。この頃には、東京低地の地域は海原となっていた。しかし、旧石器時代から急に海に没したわけではない。1万2000年から6000年までのおよそ6000年という長い時間を掛けて海進したのである。縄文時代早期頃は、東京低地地域でも比較的土地の高い所にはすぐに海の影響が及ばず、生活の場として利用されていたことが江戸川区興宮<sup>(4)</sup>や港区汐留遺跡<sup>(5)</sup>などで確認されている<sup>(6)</sup>。

縄文時代前期を過ぎると、地球は温暖化から寒冷化へと変化し、今度は海水面が低下して、海岸線が後退していく。それとともに、河川の上流から土砂の堆積作用が促され、海だったところを埋めていく。これを沖積化といい、この時代を地質学的には完新世と呼んでいる。東京低地は、この沖積化によって形成されたもので、足立区では縄文時代後期の遺物の出土が確認できるなど、東京低地の北側は早くは後期以降陸化して、人間活動が開始されたことがうかがえる。上流部から土砂を供給し、東京低地の形成を促したのは、利根川と荒川という二大河川の影響が大きい。

今から2000年前の弥生時代には、東京低地東部の葛飾・江戸川区も陸化したようで、弥生時代終り頃から古墳時代前期頃（3世紀末から4世紀）になると集落が営まれている。それ以降、東京低地には連綿と歴史が刻まれてきた。

## （3）災害と人間活動

残念なことに、前項で概観したような東京低地の形成状況を理解せず、何時から何時までが海なのかということをきちんと認識もしないで、東京低地は「昔海だった」と思い込んでいる人が多い。

また、東京低地は河川集中地帯であるが故に、洪水災害にも悩まされてきた。荒川放水路は、まさに洪水から首都東京を守るために開削された国家的事業であった。洪水は、東京低地がいかに暮らしにくい土地であるかを雄弁に物語るものとして今も語り継がれている。

洪水などの自然災害は、何も東京低地だけに集中しているわけではない。現在においても台風による洪水の被害は、全国各地で発生している。洪水以外でも、雲仙普賢岳や三宅島の火山噴火災害後の報道に接して、旧住民の方は早く帰宅できる日を待ち望んでいることを知った。甚大な被害を被った土地から離れて新天地を求めるのではなく、戻ることによって希望を持って避難生活を送られている。

東京低地でも、災禍に遭って避難した人々は同じような心境だったようだ。例えば、昭和22年に

襲来したキャサリン台風である。洪水によって東京低地でも隅田川以東の東京低地東部では、未曾有の被害を受け、今でもその時の体験談を直に聞くことができる。キャサリン台風の体験談を聞く機会に、「どこで被害に遭われたのですか」、そして「災害後の住居はどこですか」ということを質問すると、ほとんどの方が必ず元の家に戻って生活をしている。洪水などの自然災害は、大きな災禍を及ぼすが、だからといって人々がその土地を離れてしまうとは限らないのである。どうやらキャサリン台風で洪水の怖さを体験された方は、その強い印象から、昔はもっと凄い被害に遭ったのであらうと思ひ込み、「昔海だった」という先入観も手伝って、東京低地での歴史的な人間活動を否定的に見てしまう傾向があるようだ。

東京低地の歴史は、徳川家康の江戸入部とともに始まるのではない。また「昔海だった」「洪水禍」という先入観にとらわれず、東京低地をフィールドとした地域研究を行うには、その土地の形成や環境と人間活動の足跡を押さえる必要がある。

#### (4) 東京低地と葛西

東京低地の範囲と現在呼び慣わされている下町という範囲はほぼ重なっている。江戸時代の下町は、はじめ神田、日本橋、京橋を中心とした隅田川西岸地域の一部を指していたが、江戸時代後半になると次第に下谷、浅草も下町に組み込まれ、さらに隅田川東岸の本所、深川までも含めた地域を呼ぶようになった。近代になって隅田川以東の市街地化が進み、現在では葛飾、江戸川、足立区を含めた地域も下町として呼んでいる。つまり、現在では江戸時代に下町に含まれなかった都市周辺部の近郊農村地域が、江戸東京の都市拡張に伴い下町の範囲に組み込まれたことになる。これには都市の拡張とともに『男はつらいよ』や『こちら葛飾区亀有公園前派出所』など映画やマンガ、それからテレビの影響が大きく作用していることは容易に想像されよう。

江戸時代以降、下町の範囲は拡張し続けており、歴史的に下町をテーマに研究する場合、あらかじめ何時の時代・時期の下町を取り扱っているのかを明確にする必要が生じる。歴史的に下町の範囲を扱うには、そのような繁雑さが伴うため、東京低地という地理学の用語を用いることにしている。<sup>(8)</sup>

東京低地は、下町低地とか東京下町低地、東京東部低地とも呼ばれることがあり、書物でも散見することがある。貝塚爽平氏は著書『東京の自然史』のなかで、「下町低地」の範囲が明確でないので「武蔵野台地と下総台地にはさまれた低地を東京低地、多摩川ぞいの低地を多摩川低地、武蔵野台地と大宮台地にはさまれた荒川ぞいの低地を荒川低地とよぶことにする」と記しており<sup>(9)</sup>、扱う低地の範囲がいわゆる下町である場合は、下町低地、東京下町低地、東京東部低地などと呼称するのではなく、東京低地とすべきであろう。

東京低地は、古代から中世の武蔵と下総の国境となった古隅田川から隅田川以東の葛飾・江戸川・隅田・江東区域の旧下総国側を東京低地東部、古隅田川以西の足立・台東・荒川・北区域側の旧武蔵国側を東京低地西部と呼んで便宜的に呼び分けることもある。

東京低地東部は、先に記したように歴史的に葛西と呼ばれた。葛西とは、平安時代末に古代葛飾郡の枠組みが解体する中で、葛飾郡南部を太日(井)川(現在の江戸川筋)を境として東を葛東郡、西を葛西郡とに分けられて成立した。鎌倉時代になると、葛西郡は葛西氏によって荘園化され、伊勢神宮に寄進されて、葛西御厨と呼ばれるようになる。戦国時代には、葛西御厨は横領され実態のないもの

# 東京府南葛飾郡全圖

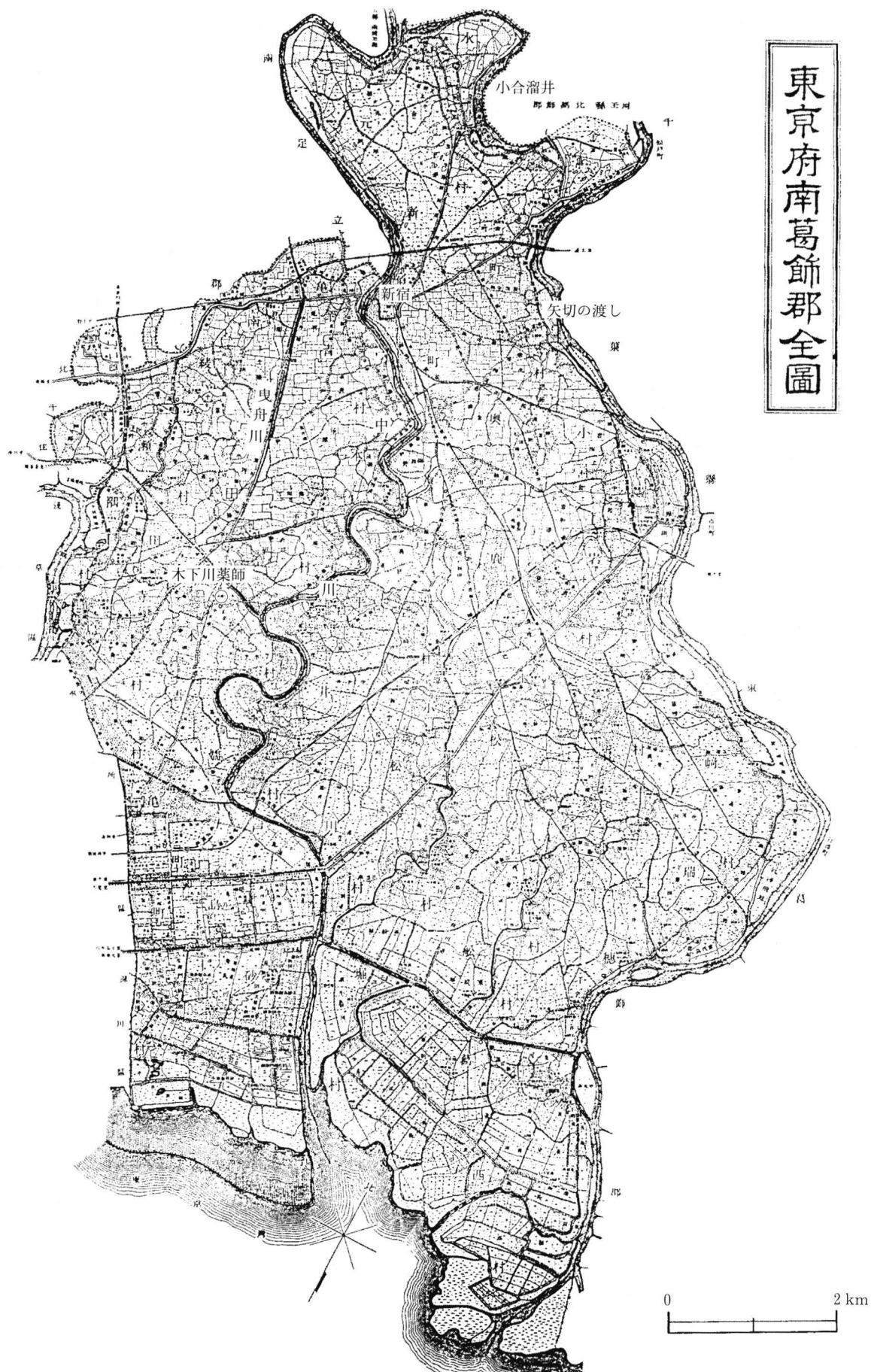


図2 南葛飾郡全図（明治48年）

となるが、葛西という領域はそのまま維持され、戦国時代後半には後北条氏の支配地となる。

江戸時代になると、この葛西地域は幕府直轄領となる。下総国と武蔵国の国境は、江戸以前は現在の葛飾区と足立区の区境となる古隅田川から隅田川の川筋であったが、江戸時代になると国境が江戸川へ移り、葛西は下総国から武蔵国へ編入され武蔵国葛飾郡葛西領と呼ばれるようになった。

慶応4年（1868）江戸が東京に改められ、明治2年（1869）小菅県が置かれると葛西領はその管轄に属し、古代末以来の葛西という領域を示す名称は消えてしまう。明治4年（1871）廃藩置県により小菅県が廃止され、旧葛西領地域は東京府の管轄となり、明治11年（1878）に「郡区町村編成法」により、南葛飾郡と名称が改められ、葛飾という葛西以前の領域を示す名称が復活した。昭和7年10月、東京の長年の懸案であった隣接町村併合問題は、隣接5郡82町村の市域編入が決定し、東京市は人口五百万人弱となり、ロンドン、パリを抜き、ニューヨークにつぐ世界有数の大都市となった。この市郡併合によって南葛飾郡は廃止され、現在の葛飾・江戸川・隅田（向島）・江東（城東）区が誕生する。ちなみに東京市に都制が導入され東京都となったのは昭和18年のことである。

## ②……………葛西の景観的特徴

### (1) 孝標女や宗長の見た風景

縄文時代以降に沖積化して形成された東京低地の景観を、人々はどのように見ていたのであろうか。ここでは特に江戸以前の東京低地東部の低地帯に占地する葛西ならではの景観的特徴について考えてみたい。

葛西周辺の景観については、古典や古記録のなかにも記したものがある。最も古い例として、平安時代後期に著された『更級日記』<sup>(10)</sup>をあげることができる。

今は武蔵国になりぬ。ことにをかきしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひちのようにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生いて、馬に乗りて弓持ちたる末見えぬまで高く生ひしげりて、中をわけ行くに

菅原孝標一行が下総から武蔵へ至る際に東京低地辺りを通過し、これといって地形的にも面白味もなく、砂地に高く延びた蘆荻と武蔵名物のむらさきが生い茂る、およそ千年ほど前の東京低地の景観が描写されている。中世においても、永正6年（1509）に連歌師の宗長が著わした紀行文『東路のつと』<sup>(11)</sup>に、葛西の景観をうかがうことのできる記述がある。

あしの枯葉の雪のうちはらひ、善養寺といふに落つきぬ、おもしろかりし朝なるべし、此処は炭薪などまれにして、芦を折りたき豆腐をやきて一盃をすすめしは、都の柳もいかでをよぶべからとぞ興に入侍し、けふの暮程に会田弾正定祐の宿所にして、夕めしの後も色々のことにて夜更ぬ、明日廿五日とて連歌の催しに、

堤行野は冬かれの山路かな

市川・隅田川ふたつの中の庄也、大堤四方にめぐりて、おりしも雪ふりて、山路を行こち侍りし也

このくだりは、宗長が江戸から舟で今井の津（江戸川区）へ向かい、葛西を訪れた際の記録で、江戸川と隅田川に挟まれた葛西には四方に大堤が築かれていたことがわかる。隔てるものがない葛西に

あって、堤は洪水を防ぐだけでなく、堤上は道としても用いられ、景観的には平地からの視線から河川を隠していた。雪の降る堤を歩いた宗長は、川辺ではなく、まるで山路を歩いているかのように感じたようだ。この記述から当時の葛西は輪中のように堤に囲まれ、開発が進んでいた様子がわかる。

## (2) 「打開きたる曠地」

江戸時代、葛西の土地柄について『新編武蔵風土記稿』(卷之二十 葛飾郡之一)<sup>(12)</sup>には、以下のよう  
に説明されている。

閩郡打開きたる平坦の地にて縦横水流通し、水田勝の沃土なれば他の郡よりも富饒の地なり、殊  
に郡南葛西の邊は江戸に近きを以て五穀の外にも菜蔬を栽て市に鬻けり、其利も又少なからず、  
又海濱に至ては漁獵を餘業とせるも多し

また、三島政行が著した『葛西志』<sup>(13)</sup>にも『新編武蔵風土記稿』と似た記述がある。

葛飾郡は、山林高低くなく、おしなべて水陸のうちひらけ、数里の間一望して盡すべし、もとよ  
り川にそひたれば、用水にとほしからず、されば水田のみ多くありて、陸田は少なし、また土性  
肥たれば糞芥の力をかるに及ばず、中にも葛西の地は、御城下に近ければ、五穀の外にも菜蔬を  
植て、江戸にをくる、その利もまた少しとせず、かゝる便利の地なれど、その地の高からざれば、  
夏雨秋霖の比は、やゝもすれは水溢の患ひをまぬかれざるも、また利中の不利といふべし、なべ  
てこの地水陸の便あり

『新編武蔵風土記稿』や『葛西志』によると、葛西は開けた肥沃な土地で、水利も良く水田が多く、  
江戸が近いために五穀の外にも蔬菜類を栽培していると述べ、『葛西志』では土地が低いために、洪  
水の憂いはあるが、水陸の便が良いと記している。『新編武蔵風土記稿』や『葛西志』からも、葛西  
の土地柄は江戸に近く、低地ならではの平らな地勢に特徴があったことがわかる。作者不明ながら寛  
政12年(1800)の『鹿島詣文書』<sup>(14)</sup>にも、葛西について「打開きたる曠地は、諸国になきよし承る」  
と記している。葛西の景観的な特徴として、景色を隔てる障害もない土地の起伏の乏しい開けた土地、  
つまり「打開きたる曠地」であることが指摘できる。

## (3) 葛西の「天然」を求めて

加藤貴氏が指摘するように、18世紀以降、江戸市民による江戸近郊への行楽が盛んになる。加藤  
氏は、その背景として「江戸の都市化の問題と、都市民の自然観や都市的な信仰形態があった」と述  
べ、江戸の都市化によって失われた江戸市中の自然と、江戸と近郊に所在する寺社を結び付ける信仰  
であると述べている。このような江戸市民が行楽によってが気晴らしする行為を加藤氏は「延気」と  
いう言葉を用いて表している。

葛西ならではの「打開きたる曠地」が、江戸時代の人々に好まれ、「延気」のために多くの旅人が  
杖を曳いている。『遊歴雜記』<sup>(15)</sup>を著した十方庵敬順は葛西の景観を、「川を見、耕地を過、遠く望ミ近  
くながめ、天然の風景一品にして賞すべきの土地なりき」(拾五 杵川浄光寺の御寿像)、「四方只深  
田のミにて、眺望又一品ありて面白し」(六十 葛飾郡亀有村の引ふね)、「渺茫と打はれて目に障る  
ものなく、田に畑に耕地の風色一品にして」(三拾貳 葛飾郡新宿の駅川添の風景)と、障害物もな  
く見晴らしの良い耕地の広がる「天然」の風景を褒めている。

敬順はことのほか曳舟川沿いの風景が印象深かったようで「その土地への風色一転して道すがら鳥に愛花に浮れ、思いよらぬ勝景に慰みてハ、寿命も延ぬべくと覚ゆ」（式編之中 六十 葛飾亀有村の引ふね）と記し、正靖も「眺望いはんかたなし」（半田いなり詣の記）と曳舟川沿いの葛西の景観を賛美している。そして敬順は江戸川沿いに佇み、「かゝる侘しき農家に止宿し風景をなぐさむことこそ、予が遊歴の骨髓になん」（式編之上 五十六 下矢切の渡し場の川添の眺望）と遊歴の心理を披瀝している。

#### (4) 川辺の行楽

葛西は釣り場としても江戸の庶民に親しまれていた。例えば、天保4年（1833）に出版された『江戸名所図会』<sup>(16)</sup>には、中川の春鯔釣りが江戸名物の一つとして、その情景を挿絵入りで掲載している。挿絵の上段には、春釣りというのは寛文の頃、上総の伍大力の船頭仁兵衛がはじめたもので、その後、岩崎兵太夫という人が継承し、春鯔釣りが広く世間に広まったこと。鯔について、海に産するものを白鯔、川に産するものを青鯔ということ。型の大小によって名前があり、九寸以上を鼻曲がり、尺を越えるものを寒風と漁師が呼んでいることなど解説文が添えられている。春鯔釣りは、産卵のために浅瀬に来た鯔に竿を向けるもので、鯔は敏感な魚で魚信もさほど強くなく、それがかえって江戸の釣人を虜にした。江戸では秋鯔釣りも盛んに行われるなど、鯔釣りは江戸の勝れた娯楽として武士から庶民に至るまで親しまれていた。

中川は、春鯔以外にも江戸の人々にとって良好な釣場として知られていた。江戸時代の釣場ガイドブックともいえる『東都釣案内図』<sup>(17)</sup>には、中川の両岸に沿って、ナ・ス・イ・マ・コ・シ・フ・ハ・

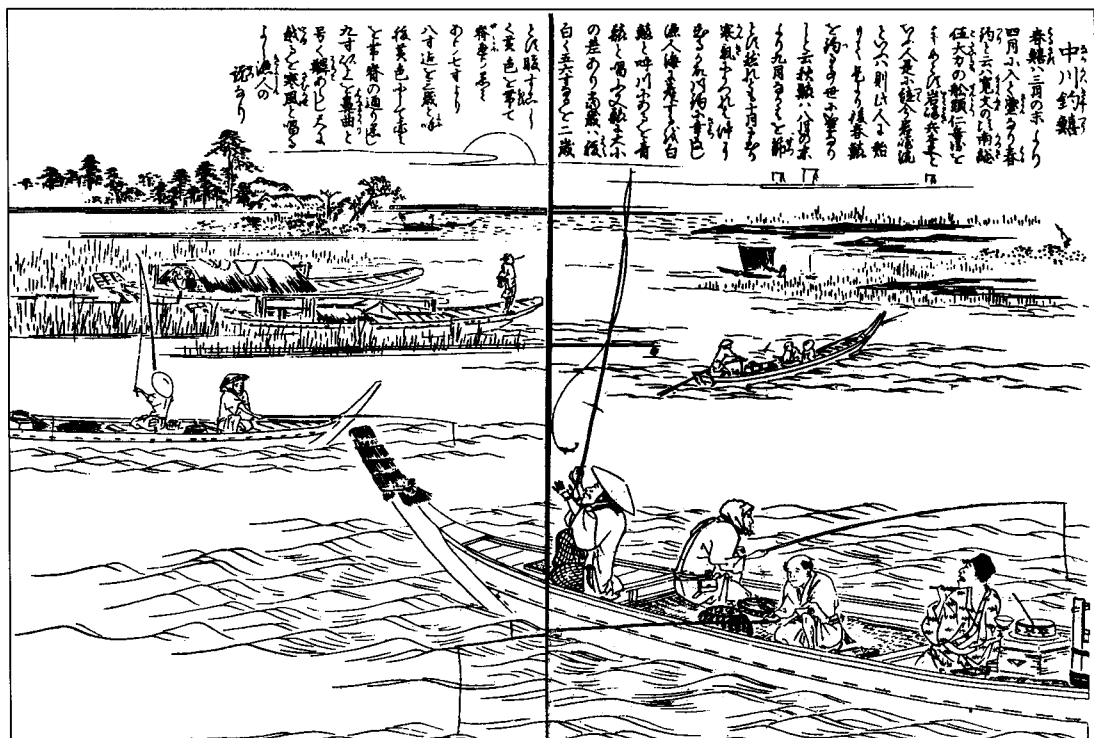


図3 中川釣鯔（『江戸名所図会』 葛飾区郷土と天文の博物館所蔵）

ウ・テ・チ・タ・キ・ク・ホ・セと記号が書き込まれている。ナはナマズ、スはスズキ、イはイナ、マはマルタ、コはコイ、シはシラウオ、フはフナ、ハはハゼ、ウはウナギ、テはテナガエビ、チはコチ、タはタナゴ、キはキス、クはクロダイ、ホはボラ、セはセイゴの略で、どの魚がどこで釣れるのかを示したもので、多くのポイントが中川に所在していたことがわかる。『釣客伝』にも、クロダイの釣場として、「立石」「木下川」(現在の東四つ木付近)「曲金」(現在の高砂付近)の地名が見え、『江戸近在所名集』にも、岡釣の場として「四つ木」が紹介されてる。江戸の川柳にも「かめ有へ行った釣人の菜を提げて」「鯰扣きの廻る木下川」など、葛西での釣り風景を詠んだものが残されている。<sup>(18)</sup>

後述するが、葛西新宿では中川でとれるスズキが名物料理として出されていた。『東都釣案内図』に見える魚類の多くも汽水産であり、葛西の河川は潮の満干の影響によって汽水と淡水とが混じる水環境が特徴であった。南側を海に接している東京低地ならではの河川の水環境といえよう。<sup>(19)</sup>

#### (5) 蘆荻

冬の葛西の川辺風景も趣があったことが『雨の舎』<sup>(21)</sup>に記されている。『雨の舎』は、享保18年(1733)に加藤敬豊という人物が、隅田川の東岸地域の名所・旧跡・神社・仏閣などを見聞したものをまとめた一書で、この地域の雪景色が紹介されている。敬豊は、千住方面から若宮を経て木下川へ向い、その途中「行道も野辺也、此辺りの雪のけしきこそおもしろけれ」、この地域の雪景色を「おもしろけれ」ととても気に入っており、以下のような描写がある。

通ふ人もまれなれば、里の犬の踏分たる跡而已幽にそ見ゆ、わきをみれば万頃縞き事を同じ、山を瞻れば千巖俱にしろし、(略)寒わたる風に、氷室の下陰までもおもいやられ、寒き芦のをれふしたるなど、ものあわれ也、汀の氷を踏みて、ひとつの鷺の下り居るを見れば、白雪のしろきと白羽のしろきと、何れか白きとのたまひしたとへも、目の前に見て面白し

人気のない雪の道や野っばらに犬の足跡だけが続き、遠くには市川から松戸へ連なる台地や筑波山と思われる雪化粧した山が見え、枯れ折れた川辺の芦は冬の荒涼とした景色をひときわ印象づけていた。

葦は河川の多い東京低地では、川辺の植生を代表する植物であり、古代から東京低地の景観を特徴付ける植物であった。先に紹介した『更級日記』にも、乗馬した人の持つ弓が隠れるほど蘆荻が繁茂している様子が記されている。また、宗長も「あしの枯葉の雪のうちはらひ」と枯れた葦の姿が寒々とした冬の川辺の風景を伝えている。葛西において「葦」は、生活にもかかせないものであったようだ。宗長は、「此処は炭薪などまれにして、芦を折りたき豆腐をやきて一盃をすすめしは、都の柳もいかでをよぶべからとぞ興に入侍し」と、葛西では炭薪が乏しく、葦をたきぎがわりにして豆腐を焼いて食している。葛飾区柴又に所在する古録天遺跡で発掘された古墳時代後期の住居跡の調査において、葦を燃料として使っていることが判明している。<sup>(22)</sup>低地では、森林が発達しないために、薪など木材資源が乏しい。低地環境ならではの葦の利用方法と言えよう。葛西では、葦は古代からたきぎに利用するなど、古くから低地に暮らす人々の生活と深く関わっていたことを指摘しておきたい。

葛飾周辺では、昭和40年代までは河川だけでなく沼などの水域には葦原が茂り、低地ならではの景観を見せていた。現在でも江戸川や中川の葦原は河川改修により減少したものの、新しく開削された荒川(放水路)や新中川(放水路)の川辺に葦原が形成されている。葦原は、水を浄化する作用や

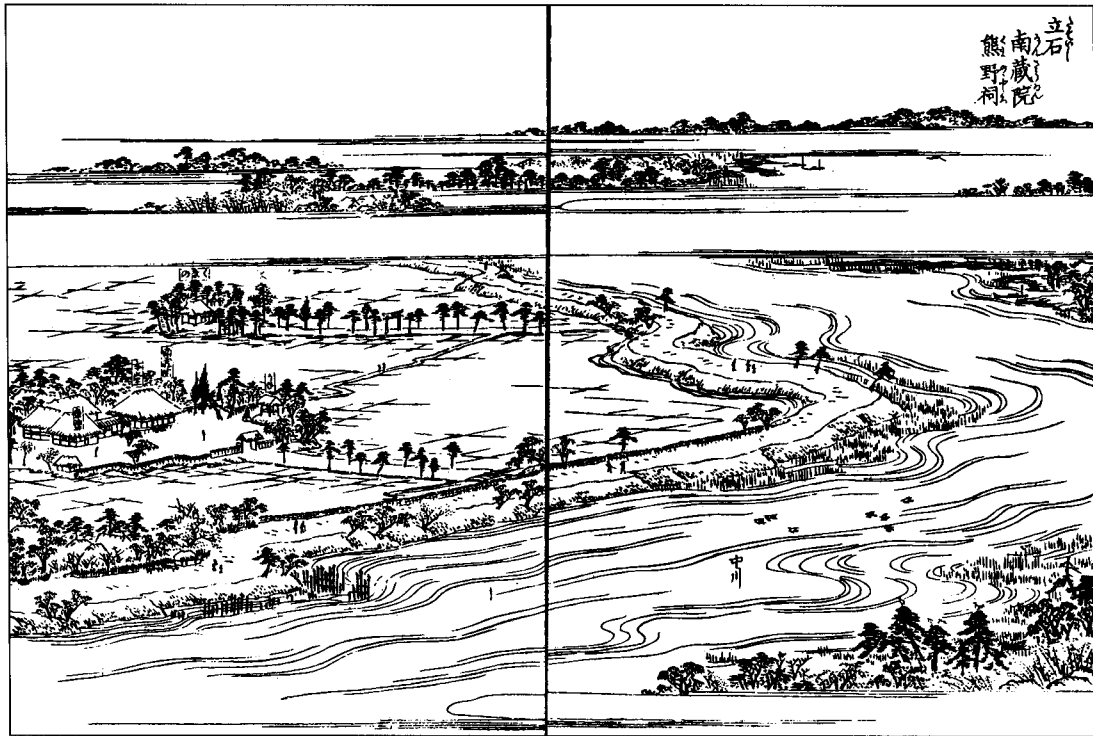


図4 立石 南蔵院 熊野祠（『江戸名所図会』 葛飾区郷土と天文の博物館所蔵）

水性生物の棲として見直され、現在では各所にビオトープが設けられている。

#### (6) 低地ならではの樹木

敬豊の『雨の舎』に「森のまれなく所にて」とあるように、葛西は低地環境ならではの森林が発達しにくい環境であり、地勢が平らで視界が開けているため、木立ちが一際目立ち、江戸の旅人の目を止めたようだ。友田次寛の『小金紀行』には、「皆田なり、はるかに木立ち見ゆ」と記し、<sup>(23)</sup>『鹿島詣文書』には「葛西の浮洲の森」を標的に舟を漕いでいるとある。

寺社には、松や杉の他、木下川薬師近くには桜が植えられ、金蓮院（『遊歴雜記』「武編之中 七十一 金町村金蓮寺南天の樹」）には、南天の奇木や榎の大木など、寺社地やその周辺は樹木が繁茂し、人々の目も楽しませていた。これらの寺社の杜は、自然に森林が発達しにくい土地柄であり、人為的に管理された樹木環境と言えよう。

葛西には、寺社の杜とともに、沖積地というこの地の風土に合った黒松などの銘木も存在していた。<sup>(24)</sup>文化9年（1812）頃に著された『埋木花』<sup>(25)</sup>（作者不明）には「本所四ツ記通り上水堀 くよふの松」が紹介されている。隅田川や亀有方面から四つ木へ向かう際には、二軒茶屋とともに「くよふの松」の枝振りが旅人の目に止まったことであろう。

目標物の定め難い低地にあって、葛西では銘木や寺社の杜は遠くからも見通すことのできる地域のランドマークとしての役割を果たした。また、日中の日差しや急な降雨には、天と地を隔てるものの少ない低地にあって、樹下は旅人にとって身を休める格好の場となっていたのである。

### ③……………老旅人の見た川沿いの景観

#### (1) 葛西を訪れた旅人

江戸時代、『遊歴雑記』を著した十方庵敬順や『嘉陵紀行』の村尾正靖も葛西に杖を曳いて「延氣」に訪れている。ここでは、『遊歴雑記』や『嘉陵紀行』を中心に絵画資料も参考にしながら、敬順や正靖を魅了した葛西の川沿いの景観に注目してみたい。

十方庵敬順は、江戸小日向（文京区）の廓然寺の住職であったが、文化9年（1812）に隠居し、天保3年（1832）71歳で亡くなっている。『遊歴雑記』は隠居後、文政12年（1829）の68歳までの江戸近郊や関東・東海地方に及ぶ紀行の見聞記である。敬順は、文化9年4月に東四つ木の浄光寺を参詣したのをはじめとして、何度も葛西の地に足を踏み入れている。西光寺（葛飾区四つ木）、客人大権現（葛飾区四つ木）、建いし大明神（立石様 葛飾区立石）、題経寺（葛飾区柴又）、香取大明神（葛西神社 葛飾区東金町）、光増寺（葛飾区東金町）、半田稻荷明神（葛飾区東金町）、金蓮院（葛飾区金町）などの寺社や文化財ほか、小合溜、新宿の渡し、小向の渡場なども訪れ、葛西名所や川沿いの風景を堪能し、その様子を記している。

村尾正靖は、徳川家三卿として知られる清水家に仕える武士で、嘉陵と号した。宝暦10年（1760）生まれで天保12年（1841）に満81歳で没したという。正靖が著した『嘉陵紀行』は、『江戸近郊道しるべ』あるいは『四方の道草』とも呼ばれ、彼が江戸近郊を旅した時の記録である。葛西に関しての記述は「木下川薬師」「下平井村聖天」「半田いなり詣の記」などに登場する。

#### (2) 曳舟川と引舟の風景

曳舟川の引舟は、『遊歴雑記』や『嘉陵紀行』にその様子が比較的詳しく記してあり、歌川広重の『名所江戸百景』「四ツ木通用水引ふね（安政4年）」や同じく『絵本江戸土産』<sup>(27)</sup>「四ツ木通引舟道」からもうかがうことができる。曳舟川の引舟は江戸の人々にも知られ、「水竿を操り櫓をおすより、またその容は風雅なり」（『絵本江戸土産』）と評されるなど、葛西の名所のひとつとしてその存在が知られていた。引舟の運行は、葛西用水の四つ木村（葛飾区四つ木）から亀有村（葛飾区亀有）の間で、発着場所がある篠原村と亀有村の2か所の二軒茶屋の間の26町（2.8km）の区間を往復していた（『遊歴雑記』）。料金は、「舟一艘を大舳百銭と定めて借切り、又ハ五七人乗合するもありて」（『遊歴雑記』「式編之中 六十 葛飾郡亀有村の引ふね」）と、「一人廿四銭」（『嘉陵紀行』）と二つの記載がある。正靖は、5人で乗っているので、24銭×5人で一舟120銭払ったこととなる。借切りの場合の百銭は割引価格で、1人24～25銭が相場だったようである。

敬順によると、雨の中「道筋荒木田とかやいふ土にて更に砂利なく迂る事夥しく（略）川添の畦路をかぞえる如くに踏め辛ふして」（『遊歴雑記』「五編之下 三拾貳 葛飾郡新宿の駅川添の風景」）亀有の土橋までたどり着いている。雨中の足元が悪いところを苦勞して陸路を行くところを見ると、引舟は雨天では運行されなかったとみられる。

発着所に用意されていた舟数は、『嘉陵紀行』によると亀有村と四木村（篠原村）の二軒茶屋に各々7艘、都合14艘用意されていた。

舟を引く綱は、淀川の舟と同じように舟に据えられた棒に結ばれている。ただし、棒の位置は舳先に近い所に据えられている。引き手はその舟を結んだ綱を陸から引っ張って舟を引く。引き手の行き来は、『遊歴雑記』では「畦路の土手の上を長綱を肩に懸て引舟し」（『式編之中 六十 葛飾郡亀有村の引ふね』）となっており、敬順の「畦路の土手の上」という記述からすると、曳舟川西岸の土手道とも、古上水と中井堀の間の土手上を往来したようにも理解することができる。

一方、絵画資料からすると歌川広重の『名所江戸百景』の「四ツ木通用水引ふね（安政4年）」や『絵本江戸土産』の「四ツ木通引舟道」では、用水の左（東）側の道に引き手が描かれている。ただし問題なのは、本来ならば中井堀と古上水の2本が描かれていなくてはならないのに、2点とも1本しか見られない点である。広重の曳舟川を題材としたの2点の作品は、謎めいた曳舟川の引舟の描写がなされているのである。

引舟の引き手の様子は、『江戸名所図会』「渋江西光寺清重稲荷」の挿絵にも描かれている。「渋江西光寺清重稲荷」では、西光寺の裏手に曳舟川と3人の客を乗せた舟が2艘描かれ、うち1艘には引き手1人が曳舟川の西岸の土手を行く姿が認められる。つまり、広重の『絵本江戸土産』と『名所江戸百景』に描かれている引き手と逆の位置なのである。

歌川広重の『絵本江戸土産』と『名所江戸百景』の描かれた時間的な前後関係は未確認であるが、前者の方が丁寧に描写されており、後者はかなりデフォルメされた描写となっている。『絵本江戸土産』と『名所江戸百景』を構図的に比較すると、『名所江戸百景』の方が目線が高く鳥瞰している構図となり、引き手や舟の数に違いが認められるが、基本的には曳舟川や上流部の屋敷や林など大きな違いは無い。大きく異なっているのは、『名所江戸百景』には曳舟川左手の土手上に松並木が描かれ、遠方に方位を示す筑波山が加わっている。問題の引舟の様子は、両方とも一人で引舟を引き、右側の土手上を往来している。つまり、『名所江戸百景』からすると引き手は筑波山の位置からして曳舟川東岸を往来していたことになる。しかし、同じような構図なのに『絵本江戸土産』には筑波山が描かれていない。仮に『名所江戸百景』の筑波山が描かれていないと仮定し、南西から北東を望んだ構図ではなく、逆方向の北東から南西を眺望したものと考えると、『江戸名所図会』と同じく引き手は曳舟川の西岸の土手を往来していることになる。また、『名所江戸百景』『絵本江戸土産』とも作品の題に「四ツ木通」と冠しているが、四ツ木通りは古上水の西側に位置する。このことから引舟の引き手は古上水の西側の土手道、つまり「四ツ木通」を綱を引いて移動していたと理解すべきである。広重の作品の疑義を正すことが目的ではないが、どうやら『名所江戸百景』の「四ツ木通用水引ふね」に描かれている筑波山の位置は誤りと判断される。

さて、引き手は『嘉陵紀行』に「おのこ」と見えるが、歌川広重の浮世絵や挿図には女性も見受けられ、男だけの仕事ではなかった。引き手は、明治期的小林清親の「東京小梅曳舟夜図」では男女二人が舟を引いているようだが、江戸時代に描かれたものを見ると、原則として一人で運行したようだ。

「四ツ木通引舟道」では、上り下りの引き手がすれ違う寸前の様子が描かれているが、友田次寛が天保12年（1841）に著した『小金紀行』によると、「かなたよりも舟人縄手とりて来る、行あふ時ハ、かたミに綱をあやとりて行、ふね綱ともに、いさゝかさハらず、年頃なれし業なりとはいへど、いとたくミなり」と、すれ違い様の妙技を記している。

引舟の乗り心地は良かったようで、引舟が行き来する古上水の流れは緩やかで、舟は揺れもせず、



図5 四ツ木通用水引ふね（歌川広重『名所江戸百景』  
葛飾区郷土と天文の博物館所蔵）

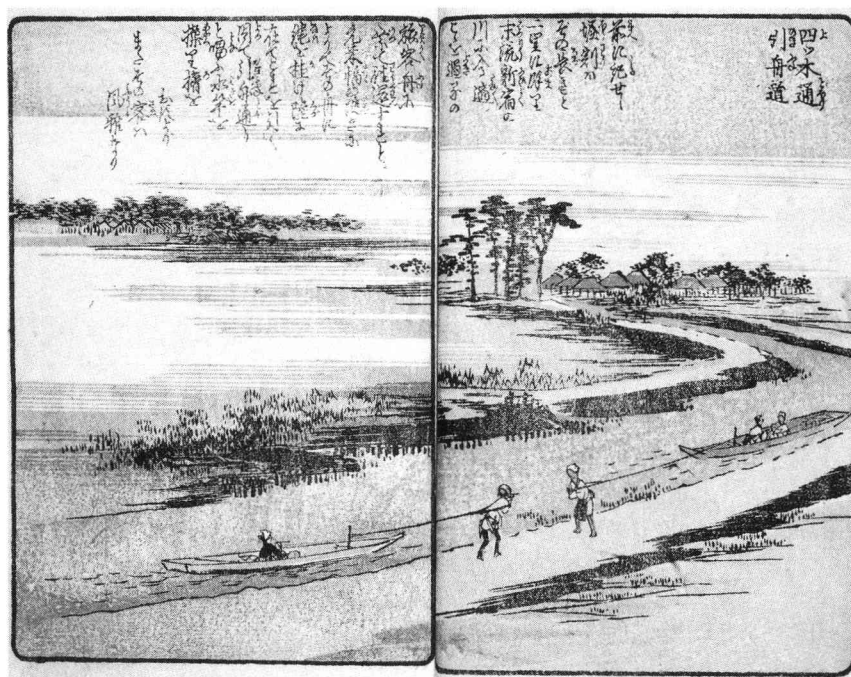


図6 四ツ木通引舟道（歌川広重『絵本江戸土産』 独立行政法人国立公文書館所蔵）

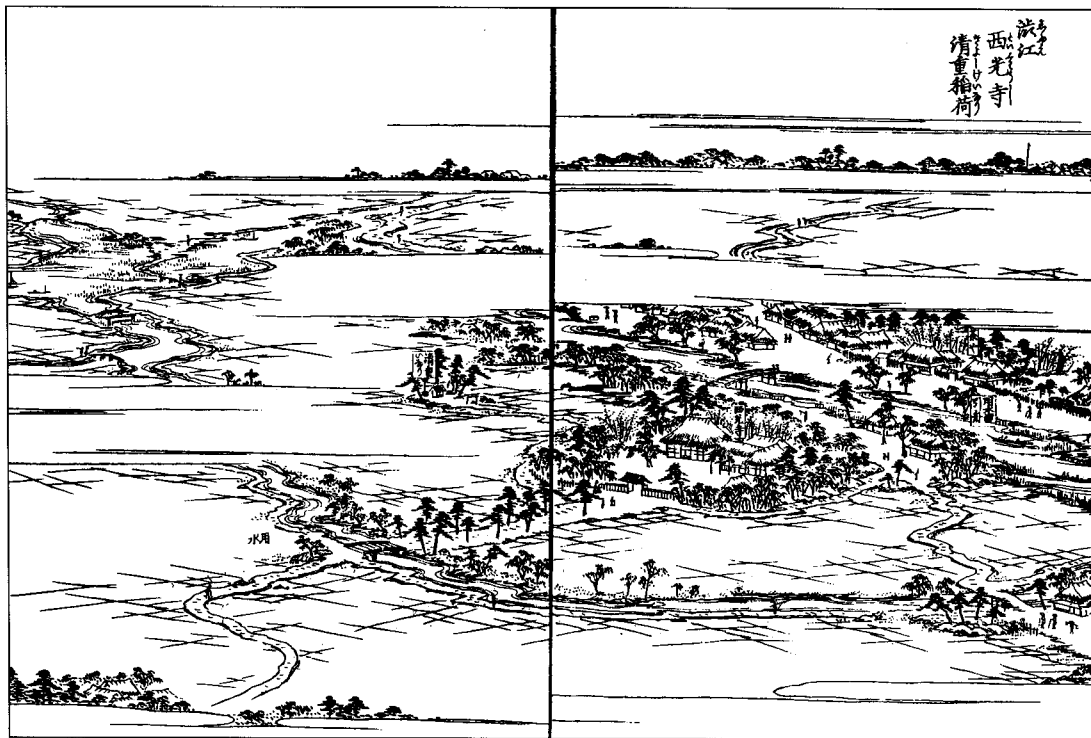


図7 江戸西光寺清重稲荷（『江戸名所図会』 葛飾区郷土と天文の博物館所蔵）

安心して座っていられた（『遊歴雑記』「式編之中 六十 葛飾郡亀有村の引ふね」）。次寛も「水平らかなれとも、はしる事ハ早し」と、川の流れは緩やかではあるが、引舟は以外と速かったらしい。葛飾は地形の起伏の少ない東京低地に位置しているので、比高差がなく川も緩やかに流れている。曳舟川の引曳は、低地という葛西ならではの交通手段といえよう。

### (3) 葛西新宿と渡しの風景

中川沿いにある新宿は葛西新宿と呼ばれ、水戸佐倉道の千住宿と松戸宿を繋ぐ宿場として知られている。水戸佐倉道は、五街道のひとつ江戸の日本橋から日光方面へ連絡する日光街道に付随する街道として位置付けられていた。日光街道の千住宿から東へ分岐し、小菅から亀有を通過して、中川に掛かる渡りで対岸の新宿へ至り、新宿からは金町を抜け水戸方面へ連絡する水戸道と小岩を抜け佐倉方面へ連絡する佐倉道とに分かれていた。葛西新宿は、江戸時代にできた新しい宿場と思われがちであるが、葛西城に関わる宿場として戦国時代に整備されたものである<sup>(28)</sup>。

葛西新宿は、渡しのある畔辺りを上宿といい、下流に向けて中宿、下宿とに分かれていた。文政12年（1829）に新宿を訪れた十方庵敬順によると、上宿には、中川屋や藤屋など4～5軒の旅籠があり、なかでも中川屋は二階建てで、部屋数も多く、当時としては珍しく二階にも便所を備えていたと記してある。敬順は案内された二階の三方に縁側をめぐるした部屋の南側に佇み風景を楽しんでいる。そこからは、広い庭も見下せ、新宿の渡し場の川向こうに目を移すと「村々の夏木だちせし青葉の中より、藁家の棟見ゆるハ鄙の一風にして、景色やはらかに面白く、右に左に遥に燃のごとく赤きハ映山



図8 新宿渡口（『江戸名所図会』 葛飾区郷土と天文の博物館所蔵）

紅の花にや、黒ミテ赤きハ楓の芽吹、黄なるハ山吹の花ならん」と色づいた花木を「川越に程よく眺望する風色天然にして奇々妙々たり」と賞している。

さらに、渡し場の兩岸の水際に見える「往来の人を乗て舟に棹さしわたす舟人の蓑笠着たる様」や「旅人の雨を忍びへ 便船するすがた」が絵には表すことができぬ面白さがあると述べている。さらに、川の流れや手前の岸で洗い物をする女や縄をもち魚をすくう男など「総て見る程の事一々めずらしく（略）風景を愛するの外なし」と新宿の渡し場の川辺の風景を賛美している（『遊歴雑記』「五編之下 三拾貳 葛飾郡新宿の駅川添の風景」<sup>(29)</sup>）。

敬順よりも12年前の文化14年（1817）の7月に新宿を訪れ、中川屋で昼食をとった村尾正靖は、旅籠の主から「二三日季候のよからぬ故か、さらに魚なし、秋に成れハ必ずこよかし、前の川にて取れたる、鱸、鯉など奉るへし」と、今回は食べさせる魚がないことを詫びられ、秋に再訪して中川名物の鯉、鱸の料理をご賞味くださいと言われている。<sup>(30)</sup>

#### （4）木下川周辺の風景と花名所

『遊歴雑記』には、木下川から浄光寺にかけての風景もよく登場する。敬順は、隅田川沿いから木下川に掛けて、「その途すから川を見、耕地を過、遠く望ミ近くながめ、天然の風景一品にして賞すべきの土地なり」（『遊歴雑記』「初編之上 拾五 杵川浄光寺の御寿像」）と賞し、浄光寺に再訪した際も「川添の風色を眺望せんと境内を立出ぬ」（『遊歴雑記』「貳編之下 七十四 木下川浄光寺杜若の再遊」）とその景色を楽しみにしていることがわかる。



図 9-1 木下川薬師（『江戸名所花暦』 東京都公文書館所蔵）



図 9-2 昭和 10 年頃の堀切小高園の花菖蒲（『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告』 第 12 冊）

浄光寺は、近郊唯一の杜若の名所として知られていたところで、『江戸名所花暦<sup>(31)</sup>』には「池中ハ一面紫にして、そのなかへハツ橋をかけわたり、往来をなさしむ」と紹介されており、「木下川の杜若」を愛でに江戸庶民や多くの文人墨客も訪れ賑わいをみせていた。また近くには桜並木があり、境内や周りには旅人や参拝客が休憩したり飲食をする茶屋があった。

『江戸名所図会』によると、葛西は四季の花を江戸に出荷するなど花卉栽培の盛んな土地であったことが挿図入りで紹介されている。天保年間には、その土地柄を活かして堀切に小高園が開園し、花菖蒲の名所としても江戸庶民を誘うようになる。<sup>(32)</sup>

##### (5) 江戸川ベリの風景

敬順は、下矢切の渡しへも足を運び川辺の風景を楽しんでいる。下矢切の渡し場近くに住む弥右衛

門という農家に一宿した敬順は、座敷に腹ばいになって、川向こうの松戸から国府台や河野風景を眺め「渺茫と取りはなしたる眺望ハ言語に絶し、又群だつ森の間々遅桜の咲し様ハ、岩間を伝ふ滝のごとく、又は処々藁屋の見ゆるも優にやほらかにして、唐土の晴湖のかくやと、右に左に目の休む隙なし」と下総台地の西側縁辺に連なる崖線の風景の素晴らしさを述べている。

また、座敷から見える眼前の江戸川についても「帆をあげてはしる大小となき舟の行ちがふ、その風景など只気億にのみ覚えて筆端にハ尽くしがたく」と賛美<sup>(33)</sup>している。敬順は、寝床で櫓の音に耳を寄せ、ヨシキリの鳴き声に驚かされ、月夜を楽しみ、明け方近くの時の鐘を微かに聞きながら朧月夜の川添いの風景を「きのふ見し眺望とハ、又一段にして、朧月夜に川添をながむる風景は面白くして、兎角の論なし」と昨日の景色とは一風変わった明け方の景色を堪能している（『遊歴雑記』「式編之中 五十六 下矢切の渡し場川添の眺望」）。

#### (6) 小合溜・小向の渡しの風景

小合溜井を訪れた十方庵敬順は、川の水を満々と貯えた有様を「大河のごとし」と比喻し、その大きさを「長さ貳拾余町、はゞは広き所貳三町、深さははかりかたし」と記している。そして地元では呼び名を溜井ではなく「溜」と呼んでいることを紹介している。小合溜井には「魚鳥夥しく」これらの魚鳥をとって生業を営む者も多く、江戸からこの地に泊まりがけで訪れ、釣りを楽しむ人もいたという。小合溜井の風景は「天然にして面白く、芦葭等の中には行々子のくぜり、又ハ空に舞、雲雀の声迄優に珍らしく、或ハ遅桜の茂林の間々満花せし風情いかんともいひかたし」と鳥や花木を楽しんでいる。

溜井の水辺の風景を楽しみつつ小向の渡しへ出た敬順は、川端の鉄次郎という食店で昼食をとり、舟で松戸へ渡るが、その際の兩岸の風景を「絶品」と称え、渡しの風景はどちらかといえば小向よりも松戸の方が優れていると記している（『遊歴雑記』「四編之上 拾八 葛飾郡小合の溜小向の渡口眺望」）。

#### (7) 休み処と名物

曳舟川沿いには二軒茶屋と呼ばれる2軒の茶屋が篠原村と亀有村に2か所あった。『嘉陵紀行』では世継（四つ木）に二軒茶屋があったとしているが、正しくは篠原村であろう。二軒茶屋のほかに、四つ木には酒や菓子を売る家（店）が6〜7軒あった。旅人は、これらの茶屋や店で足を休め、食事や酒、菓子などを口にしながら、旅話に花を咲かせたのだろう。

ただし、敬順によると篠原村にある藤棚の茶屋の蒲焼は「風味麁悪にして喰ふべからず」（『遊歴雑記』「式編之中 六十 葛飾郡亀有村の引ふね」）と、料理の味には敬順ならではの酷評が下されている<sup>(34)</sup>。

また、敬順は下戸だったようで、旅先では持参した茶道具で煎茶を楽しむのが趣味であった。四ツ木村の酒店では、同行の仲間は「いかゞしき木の芽田楽」で盃をすすめていたが、敬順は店の井戸水を用いて茶を入れている。店の老婆にも振る舞ったところ、店に居あわせた別の客が「その茶の煎じ空給はれ」と言って茶殻に醤油を掛け酒の肴にしている。こんなやり取りも旅ならではの敬順は「又一興かや」と述べ、旅先の酒店でのエピソードを紹介している（『遊歴雑記』「七十四 木下川淨

光寺杜若の再遊」)。

篠原村の茶屋で出される蒲焼は別としても、葛西から流山にかけては「鮒鯉鯰の類多く、風味又一段とよしかや」(『遊歴雑記』「四編之上 拾八 葛飾郡小合の溜小向の渡口眺望」)と敬順が述べているように、葛西は鮒・鯉・鯰それから鱸を使った料理が名物であり、その名残は現在でも柴又帝釈天参道脇の料理屋のメニューにも見ることができる。曳舟川沿いの茶屋には、蒲焼や田楽以外にも、普通の豆腐などが商われていたことが『成田の道の記』に書かれている。

味にうるさい敬順ではあったが、老人ゆえに思うように地の食べ物を賞味する事がかなわなかったらしい。敬順は小向の渡しの鉄次郎という食店で昼食をとった際、鯰を小さくたたきにしたものを天麩羅にし、さらに蕨をいれて煮て作った「鱸の田楽」を歯がないために食べることができず、「いか成る風味やらん、歯なきものハ旅中先々食事に倦事殆多し」と嘆いている。

葛西新宿では、中川でとれる鯉や鱸などの魚料理が名物として旅人の舌を楽しませていた。『江戸名所図会』にも新宿の風景が描かれており、絵の説明には鯉が美味であると記されている。敬順の葛西新宿関連の記事にはみられないが、正徳5年(1715)に峯雪山昌隆によって書かれた『駅路鞭影<sup>(35)</sup>記』には、「宿の端ニ茶屋有り、餅を売、うばか餅とて名物也」とみえ、川魚料理以外に葛西新宿の名物として「うばか餅」があったことが知られる。

## ④……………開発と景観

### (1) 葛西から南葛飾郡へ

江戸庶民の「延気」の場として、人々の五感を楽しませた葛西は、明治期になっても堀切周辺の菖蒲園人気も手伝って、多くの人が足を運んだ。しかし、十方庵敬順や村尾正靖が賛美した葛飾の風景は近代になると次第に変貌していく。

「その容は風雅なり」とされ、葛西名物のひとつだった曳舟川の引舟も、明治15年頃に姿を消してしまう。坂田正次氏によると、引舟衰退の原因として人力車の稼働によるところが大きいと指摘している。また、明治30年には国鉄の常磐線亀有駅と金町駅が開設され、大正期には京成電鉄も開業し、駅を中心に新しい町場が拡張して人口の集中を促していった。近代になって、人力車、車、鉄道などの陸上交通が整備され、「渺茫と打はれて目に障るものなく、田に畑に耕地の風色」とされた「打開きたる曠地」の葛西は、南葛飾郡と名称も変わり首都東京の近接地として都市化の波にのまれていくことになる。

### (2) 荒川放水路と二つの災害

それでも明治期までは、江戸の旅人を楽しませた曳舟川沿いの開けた田園風景は、道や橋、鉄橋が設けられたとはいえ、まだ江戸からの風情を残していたことが、当時の地図を広げることによって確認することができる(図2)。

それも東の間のことであった。大正期になると、政府は首都東京を水害から守るべく荒川放水路の開削事業を始める。これにより、小梅から四つ木間は寸断され、曳舟川の西方には大きな土手の壁がめぐり、視界を狭くしてしまった(図10)。



図 10 大正 10 年 東京低地東部 明治 43 年に東京を襲った大洪水により、国は首都東京を守るべく、荒川放水路の開削を計画した。上の図では、まだあまり開削が進んでいない工事途中の荒川放水路が白い帯状に見られる。大正 10 年には現在の JR 常磐線や総武線、京成電鉄が敷設されているが、町場の発達はまだ見られず、道路の整備もまだ進んでいない。人家は、江戸以前からの旧村の微高地上に展開し、周辺にはまだ広大な耕地が残っている。(国土地理院 5 万分の 1 地形図より)



図 11 昭和 30 年 東京低地東部 昭和 5 年荒川放水路が完成し、さらに昭和 13 年から葛飾区と江戸川区を貫く  
中川放水路が計画された。江戸川区側では工事が進んでいる様子が認められる。中川放水路の完成は上図の  
8 年後の昭和 38 年である。東京低地東部における近代以降の景観的特徴のひとつとして、荒川と中川とい  
う 2 本の放水路の存在をあげることができよう。上図では、東京を襲った関東大震災と第 2 次世界大戦と  
いう災害後の開発の様子がわかる。道路網も整備され、旧来とは異なった鉄道の駅を中心に町場が発達して  
おり、図 10 に比べ宅地化が進み、耕地が縮小している。(国土地理院 5 万分の 1 地形図より)

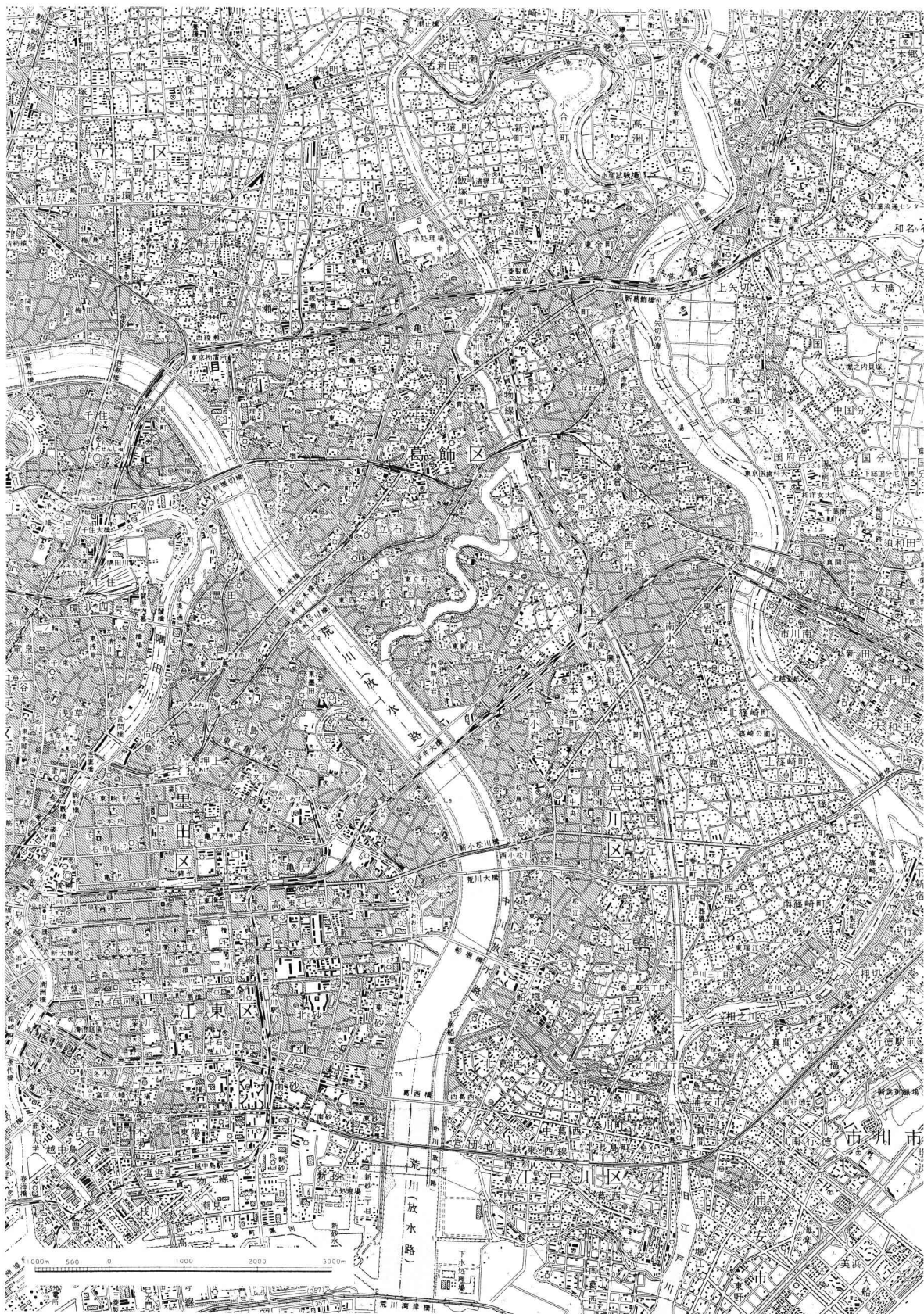


図12 昭和56年 東京低地東部 図11よりも飛躍的に宅地化が進んだ様子が一目でわかる。地図上で宅地部分が濃く表されているため、かえって河川が白く抜けて目立っている。図10に見られた広大な耕地は、更に縮小され葛飾区では水元地域を除き、宅地の中に取り残されるように存在している。この頃には葛飾区と江戸川区を合わせた人口が100万近くになっている。図10・11と見比べると東京低地東部の開発の様子がわかるとともに、景観的な変化も知ることができる。特に、上図は高度経済成長以降に急激に開発された東京低地東部の様子を読み取ることができよう。(国土地理院5万分の1地形図より)

また、これに輪を掛けて景観に大きな影響を及ぼしたのが大正 12 年に起こった関東大震災である。首都東京の機能は壊滅的な被害を受け、罹災した人や工場は空き地のある開けた土地を求めて荒川放水路以東へと移ってくる。南葛飾郡の水田や沼などの水域は、埋め立てられ、宅地や工場として姿を変えてしまう。葛飾区を例に関東大震災後の人口の動態をみると、大震災前の大正 10 年に 2 万 8375 人だったものが、昭和元年には 2 倍弱の 5 万 5495 人、昭和 5 年には 3 倍近い 8 万 4456 人となっており、いかに関東大震災によって人口が首都近郊へ流入してきたかがわかる。これに伴い宅地や工場地が増える一方で耕地などの面積を狭め、低地特有の景観が失われることになる。樹木のかわりに煙突や鉄塔が目立つようになってしまった。

昭和になって、さらにこの地域の開発を促す災害が起こる。昭和 15 年から 20 年に掛けて行われた太平洋戦争である。特に昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲は、東京の主要部を焼きつくすなど、度重なる空襲で東京は焼け野原と化してしまった。そのため関東大震災と同じく、都市近郊へと人口が流入することになった（図 11）。

戦後、首都東京の機能が回復し、景気の高揚とあいまって東京近郊での人口増加傾向は続き、昭和 40 年代の高度成長期を向かえ、高層の建物も建てられるようになり、葛飾の都市化が急速に促されるようになった（図 12）。昭和 50 年代以降には、荒川に沿って首都高速道路が建設されたことにより、荒川を境に南北に大きな構造物が出現し、景観的には視界を遮る障害となってしまった。

### (3) 堤の桜

江戸時代には、下町界隈の花見は、上野の山に飛鳥山、そして向島と相場が決まっていた。しかし、明治になると次第に東京の町場が広がるにつれて、隅田川周辺の開発が進み、向島の桜は昔ほどの絢爛さがなくなってしまう。かわって荒川（隅田川上流）の堤の千住から江北周辺の桜が新しい花見処として賑わいを見せた。田山花袋の『東京近郊 一日の行楽』によると、五色桜、法輪寺、猩々、一葉、普賢像、関山、大提灯などの変種も多く、花のトンネルもあり見事であると記している。この荒川堤の桜も荒川放水路や堤防工事のため姿を消す運命となる。

近世の葛西にも、木下川付近や小合溜などに桜が植えられ、人々の目を楽しませていた。川辺の堤には桜が良く似合い、江戸川や中川堤でも近代以降に桜が植えられ、戦前までは、東京近郊の花見処として近在から多くの人々が集った。しかし、江戸川や中川堤の桜並木も荒川堤の桜と同じ運命をたどってしまう。戦中、戦後伐採されて次第に姿を消し、今では中川左岸の葛飾区奥戸の森永乳業付近の土手に往時の面影を残すのみとなってしまった。戦時中、薪を確保するために伐採をしたり、堤に桜などの木があると増水時に堤を壊す恐れがあるという治水上の理由によって姿を消していったようだ。現在では、荒川（放水路）や中川などの堤に部分的ではあるが、桜の植樹が試みられていると聞く。川辺の堤には桜並木が良く似合う。桜並木の復活が待たれるところである。

### (4) 川辺景観の変化

河口部は鱸釣り、中流域は岡釣りの名所として親しまれた中川は、近現代の流域部の開発によって、水質が悪化していった。また、水環境を無視した河川改修工事によって、水質浄化に役立っていた葦原も打撃を受けた。高度成長期には中川や新しく開削された荒川（放水路）までも異臭を放つまでに



図13 首都高速道路によって遮られた堀切菖蒲園の景観

汚染されていった。

昭和40年代後半頃から公害による環境破壊が社会問題化し、環境に対する人々の注意を呼び起こすようになった。水質浄化への努力もはられるようになり、今では中川に釣り糸を垂れる光景も見られるようになったが、中川が近代以前の生態系に戻り、生息していた魚影が復活することまでは望めない。

荒川や新中川は、近現代になって広大な土地を開削して造ったもので、通水した当初には川辺の自然はなかった。しかし、荒川が開削されて、70年以上、新中川40年を迎える今日、双方の川辺には自然が再生され蘆荻が繁茂している。コンクリートの堤防が人と水辺とを隔てる障壁となっている中川よりも、かえって川辺まで近づける荒川や新中川の方が、釣りなどを楽しむ姿が多く見受けられるようになっている。近世に人々の憩いの場となっていた中川の川辺の景観は失われ、現在では荒川や新中川などの放水路沿いが東京低地東部を代表する人々の憩う川辺景観として注目されてきている。

## おわりに

東京低地東部の近世葛西の景観について、地勢からひも解き、その特徴や江戸人から見た葛西の景観的魅力などを探ってみた。

葛西の「打關きたる曠地」では、寺社の杜や銘木などの樹木は旅人のランドマークの役割を果たし、その樹下は休息の場ともなった。水辺には蘆荻が繁茂し、中川や小合溜には釣人の集う格好の憩いの場となるなど、これらの要素が葛西の低地ならではの景観を醸し出していた。さらに、十方庵敬順の『遊歴雜記』と村尾正靖の『嘉陵紀行』などを通して、葛西における川沿いの風景の様子を知ることができた。

先にも紹介したが、加藤貴氏は「江戸近郊名所への誘い」の中で、「十八世紀以降の江戸市民の広範な行楽行動の展開の背景には、江戸の都市化の問題と、都市民の自然観や都市的な信仰形態があった」と指摘し、「名所は、自然との交流や神仏との交感をつうじて、江戸市民に「延気」を約束して

くれた」と述べている。本稿では、江戸の都市化によって自然が失われたことにより、江戸人がどのような自然を江戸と近郊に求めたのかを探ってみた。

その結果、葛西は「天然なる奇麗にして眺望いわんことなし」と草花・木・鳥などの自然の織り成す「天然」とその眺望が素晴らしく、江戸の人々から好まれていたことがわかった。特に、眺望の利く、低地特有の「打關きたる曠地」と川辺を中心とした川沿いの風景が葛西の景観の特徴と指摘することができる。中川や小合溜井は、釣場としても人を集めた。

18世紀以降、葛西は江戸庶民の「延気」の場として『江戸名所図会』の中でも紹介されるようになり、江戸の人々を受け入れるために、様々な装置を仕掛けて行く。寺社仏閣や信仰だけでなく、茶屋などの休み処が設けられ、川魚料理などの名物を用意したり、花名所を整備したり、江戸と行楽地葛西を結ぶ曳舟川に引舟を運行したりと、行楽地としての舞台装置が整えられていったのである。

葛西は、景観的な魅力とともに、「然るに田舎ハ時々の流行に移されず、よろず古雅の多きハ片鄙にこそ、昔の遺風ぞ伝れり」（三編之上 五十九 青砥左エ門が山葵おろし）と敬順は『遊歴雑記』のなかで述べ、葛西には眺望や名所旧跡の他に、都市江戸で失われた遺風が見られることも魅力だとしている。江戸の都市化によって、江戸から消えた自然や遺風までも葛西に求めていたのである。近代以降、二つの災害を契機として、都市化という豊かさを求めることで、江戸の人々に愛された葛西の風景は、天空の視界も狭めながら、川の汚れとともに姿を失ってしまった。今は、堀切菖蒲園や水元公園の水辺環境に、江戸人を魅了した葛西の景観を僅かにしのぶことができるにすぎない。

## 註

- (1) — 入本栄太郎『増補葛飾区史』上巻 1985年3月
- (2) — 加藤貴「江戸近郊名所への誘い」『大江戸・歴史の風景』山川出版 1999年10月
- (3) — 「日本歴史における環境と人間活動に関する総合研究—B班：日本歴史における災害と開発Ⅱ」の研究会では、東京低地東部の景観と災害についての発表を行った。本報告では、景観についてまとめ、災害については別の機会に報告したいと考えている。なお、拙稿「3. 旅老人の見た川沿いの景観」「かつしか江戸の景観—十方庵敬順と村尾正靖の見た川沿いの景観—」『博物館研究紀要』第九号（葛飾区郷土と天文の博物館 2002年3月）を基に構成した。
- (4) — 中村進『郷土資料目録 其一』自家製謄写版 1980年7月
- (5) — 福田敏一・石崎俊哉編『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター 1997年3月
- (6) — 江戸川区興宮では中川放水路開削の際に縄文早期条痕文土器2片とカキ、クルミ、シカ下顎骨が採集されている。港区汐留遺跡からは武蔵野台地の波蝕台が確認され、縄文早期条痕文土器が多数出土している。興宮例などは当時上流から流れてきたものだとする考えが支配的だったが。しかし、汐留遺跡の事例でもわかるように、縄文時代になって武蔵野台地と下総台地の間に急に海が入り込んできたのではなく、河川沿いに低いところから海岸線が入り込むのであって、早期の段階ではまだ標高の高い所は陸域として存在し、生活活動の場として利用されていたのである。この点に関しては拙稿「東京低地東部の形成と環境変遷」『地理』48—10 古今書院 2003年10月を参照いただきたい。
- (7) — 村石真澄・橋本真紀夫・辻本裕治也「伊興遺跡の立地環境と古環境について」『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 1999年3月
- (8) — 谷口榮「東京低地の中世遺跡」『東京低地の中世を考える』名著出版 1955年3月
- (9) — 貝塚爽平『増補第2版 東京の自然史』紀伊国屋書店 1987年3月
- (10) — 『更級日記 日本古典文学大系』岩波書店 1982年12月
- (11) — 「六八 東路のつと」『葛西城 Ⅷ』第3分冊別刷 文献史料・年表 葛飾区遺跡調査会 1989年3月
- (12) — 『大日本地誌大系（二）新編武蔵風土記稿 第貳巻』雄山閣 1957年3月（以下同じ）
- (13) — 『葛西志（全）』図書刊行会 1971年8月（以下同じ）

- (14) —「七 鹿島詣文章」『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月（以下同じ）
- (15) —「一二 遊歴雜記」『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月（以下同じ）
- (16) —「一一 江戸名所図会」『葛飾区古文書史料集一三 かつしかの地誌2』葛飾区郷土と天文の博物館 2003年3月
- (17) —長辻象平『江戸釣魚大全』平凡社 1996年3月
- (18) —註(17)と同じ。
- (19) —「一 江都近在所名集」『葛飾区古文書史料集一三 かつしかの地誌2』葛飾区郷土と天文の博物館 2003年3月
- (20) —葛西では一年中釣ができたわけでは無く、鷹場のために秋から冬にかけて殺生が禁止されていた。「蕨が咲くと葛西へ釣の客」と釣解禁を詠んだ川柳もある。
- (21) —「七 雨の舎」『葛飾区古文書史料集十 かつしかの地誌1』葛飾区郷土と天文の博物館 1997年3月
- (22) —パリノ・サーヴェイ「自然化学分析」『古録天遺跡Ⅲ・古録天東遺跡Ⅳ』葛飾区遺跡調査会 1995年3月
- (23) —「一五 小金紀行」『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月（以下同じ）
- (24) —『増補葛飾区史』下巻（発行年は註(1)に同じ）によると、区内の老木名木一覧には46件中約4割にあたる18件のマツの銘木が記されており、マツがこの地域の代表的な樹木であったことがわかる。ちなみに松以外の樹木をあげると、クス7件、イチョウ6件、ケヤキ4件、マキ3件、サイカチ、タブノキ、ヤマモミジ、クロガネモチ、ツバキ、エノキ、マキが各々1件ずつ記載されている。
- (25) —「四 埋木花」『葛飾区古文書史料集十三 かつしかの地誌2』葛飾区郷土と天文の博物館 2000年3月（以下同じ）
- (26) —「一一 嘉陵紀行」『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月（以下同じ）
- (27) —「一四 絵本江戸土産」『葛飾区古文書史料集十三 かつしかの地誌2』葛飾区郷土と天文の博物館 2000年3月（以下同じ）
- (28) —谷口榮「発掘された葛西城」『葛西城とその周辺』

たけしま出版 2001年5月

- (29) —『嘉陵紀行』『半田いなり詣の記』によると、川の淵には渡守の小屋があったと記されている。また、『遊歴雜記』『五編之上 三拾壹 光増寺御真向由来』によると、「新宿の河野渡し守ハ老人の舟賃五拾銅三十銅とたずねるを以て、光増寺より舟切手を兼て諸方にくぼり置き、壹枚を以男女五人までハ無錢にて往来穩也」と渡舟の紙切手（切符）の絵を掲載している。光増寺詣で混み合うと渡守が私賃を1人30から50銅とつり上げるので、光増寺発行の切符を前もって配っていたことがわかる。この新宿の渡しは、享保14年に亀有溜井が廃止され中川が改修されたことにより、往來の確保のために設置されたもので、『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』『二 駅路鞭影記』の「享保十四酉ノ年此ハ溜池の上下船渡しシニナル（下ヶ札）」という記事からも裏付けられる。
- (30) —『嘉陵紀行』『半田いなり詣の記』には、農業の休みに中川で網で魚をとる男の話が載っている。川淵の浅い所に稗を混ぜた餌を夕方置き、夜になって魚が集まった所に網を下ろすとセイゴ、鯰、鮒の類が多くとれるという。とれた魚は売ったり、自分で食べたりしている。この男の話によると今日も2尺程の鱈をとったと言っており、正靖はその男と出会う前に新宿の中川屋で2、3日天候が悪いので魚がとれないのでお出しできないと詫びられている。正靖はどのように思ったのであろうか。
- (31) —谷口榮「きねがわの杜若」『あらかわ学会年次大会99講演論文集』あらかわ学会 1999年10月
- (32) —橋本直子『堀切菖蒲園—葛西花暦』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月
- (33) —白い帆を張った舟が江戸川を往來する有様は、明治38年に発表された幸田露伴の『付焼刃』にはじめて描写され、それ以降、夏目漱石の『彼岸過迄』などその後の近代文学作品に使われるようになった。近代までは、白い帆掛舟は江戸川の景観を代表する風物詩として水面を行き交っていたのである。
- (34) —明治に書かれた河竹黙阿弥の脚本『富士額男女繁山（女書生繁）』の「隅田川道行の場」の場面に登場する「四つ木の藤屋」（『増補葛飾区史』下巻「第九章文学」）は、篠原村の藤棚の茶屋のことを指しているものと思われる。
- (35) —「二 駅路鞭影記」『葛飾区古文書史料集八 かつしかの紀行文』葛飾区郷土と天文の博物館 1995年3月

（葛飾区郷土と天文の博物館、国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（2003年5月23日受理、2003年7月18日審査終了）

---

## **Landscape of the Eastern Part of the Tokyo Lowlands: Features of the Landscape in Kasai and Their Transformation**

TANIGUCHI Sakae

The area of lowland that extends over the eastern part of the Tokyo metropolis is called the Tokyo Lowlands. At one time the Tokyo lowlands served as a boundary between Musashino Province and Shimousa Province, with the Sumidagawa River serving as the boundary between the two provinces prior to the Edo Era. The region east of the Sumidagawa River that is comprised by present-day wards of Katsushika, Edogawa, Sumida and Koto has historically been referred to as Kasai.

During the Edo Era many inhabitants of Edo visited Kasai on the outskirts of Edo, which served as recreational area. Historical materials from the time such as “Yureki Zakki” by the Jippo-an Keijun and the “Karyo Kiko” of MURAO Masayasu allow us to form of picture of what it was like there.

KATO Takashi has suggested that “problems related to the urbanization of Edo and the view of nature and urban beliefs of urban dwellers lay behind the development of extensive recreational activities of the citizens of Edo from the eighteenth century onwards” and says “it was through interaction with nature and empathy with Shinto and Buddhism that famous places promised a ‘kinobashi (feeling of relaxation)’ to the citizenry of Edo.” This paper focuses on this suggestion, and by discovering the nature of the landscape of the Kasai region, which was visited by the people of Edo, the aim is to employ these landscape features to shed light on part of the regionality of Kasai situated in the Tokyo lowlands.

The findings of this investigation suggest that the Kasai landscape was an open expanse with a commanding view and that it had a river landscape consisting largely of riversides. In Kasai there is a concentration of rivers and it was made up of flat land with few undulations as one would expect of lowland. The land had “an indescribable natural beauty” and reeds grew thick by the water’s edge and the “nature” of the open land was formed by an interweaving of grasses and flowers, tress and birds. We also learn that the people of Edo were very fond of its wonderful vistas. Nakagawa and Koaidame were places where fishermen gathered for recreation and relaxation.

From the eighteenth century onwards Kasai, which had become a place where the citizens of Edo enjoyed a “feeling of relaxation” and which had been described in the “Edo Meisho Zue (An Illustrated Guide to Celebrated Places of Edo),” saw not only the establishment of temple and shrine events, festivals and religious worship, but also the construction of tea houses and other places of relaxation in order to entertain the people of Edo. The preparation of local delicacies such as dishes made from freshwater fish,

---

---

the establishment of beautiful flower gardens, and the operation of towboats across the Hikifunegawa River that linked Edo and Kasai set the scene for an area that offered leisure and relaxation.

However, from the Modern Era onwards the extensive tracts of open land known as Kasai were divided up as a result of the digging of water discharge channels for the Arakawa River. While the land was being consumed by the wave of urbanization that had been spurred on by the dual disasters of the Great Kanto Earthquake and the Second World War, the landscape of Kasai that had been admired by the people of Edo vanished as even the views of the sky narrowed and the rivers became polluted. All that remains of the landscape of Kasai from the Early Modern Period are the glimpses afforded by Horikiri Shobuen (Horikiri iris garden) and Mizumoto Park.